

十 十次の答

石井十次

岡山県さらに宮崎県西都市茶臼原ちやうすはらに児童の福祉・教育施設を開き、約三千人の恵まれない子どもたちを救済した石井十次いしじゅうじは、慶応元年（一八六五年）、高鍋町馬場原ばばのはらに石井家の長男として生まれました。負けん気が強く働き者の父と、優しい母の愛に包まれて、十次はすすくと成長しました。「世の中や国のために、役に立つ人間になりたい。」という気持ちが強かった十次は、明治十五年（一八八二年）医師萩原先生との出会いがあり、岡山県の医学校へ進むことになりました。

十次は、悩んでいました。思い立ったらすぐ行動に移してきた十次が、一年半以上も悩んでいました。

「医者になるべきか、それとも子どもたちの救済に身をささげるべきか。」

こんな悩みをかかえるとは思っていませんでした。十次は、四年間必死になって医学の勉強をしました。しかし、医学校制度改正のために、もう一年、医学の勉強を続けることになったのが、そもそもその悩みの始まりでした。十次は今までの苦勞がたたって、かなり健康をそこねていたのです。そこで、しばらく休養を兼ねながら、空気のきれいな田舎の上阿知診療所かみあちで、医者としての実習に向けた代診をすることになったのです。診療所の隣には大師堂だいしどうがあり、そこは巡礼の人や恵まれない人たちの宿にもなっていました。十次は毎朝のように大師堂を訪れて、身の上話を聞いたり、わずかばかりでしたが、食べ物などをもっていったりしていました。

その優しさに満ちた行動は、十次にとって、ごく自然のことだったのかもしれない。十次の母は、困った人が

いと必ず救いの手をさしのべ、世話をしていました。十次がまだ幼いころ、十次と同じ年ごろで親のいない少年がいましたが、十次の母は、十次と同じようにいつくしみ育てていました。十次はそんな母を誇りに思い、成長していったのでした。

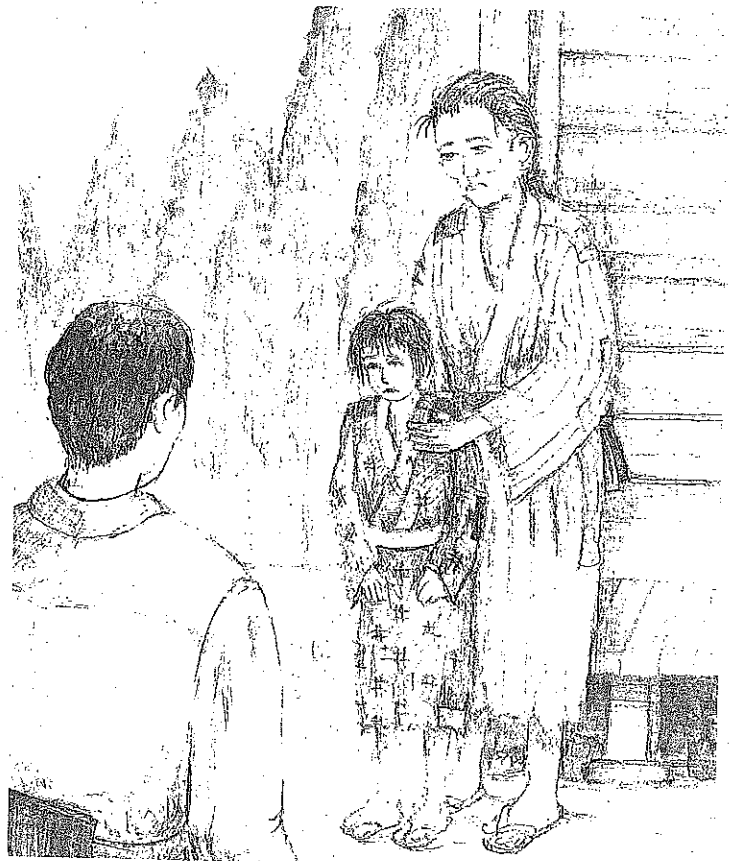
しかし、その優しさが十次に難問を投げかけることになりました。

ある日、大師堂に身を寄せていた女性から、七歳になる男の子の面倒を見てもらえないかと、泣いて頼まれたのです。十次を信頼できる人物だと思ったからでしょう。

彼女は、一家五人で四国巡礼の旅に出たのに、途中で夫と娘をなくし、今は母と子三人になっていました。十次はその母親の頼みをどうしても断ることができずに、男の子を引き受けることにしました。半年ほどの代診生活中に、結局十次は、三人の子もたちの面倒を見ることになるのでした。

健康が回復した十次は、妻の品子^{しなこ}そして三人の子もたちと一緒に岡山市に戻り、三友寺^{さんゆうじ}という寺の一部を借りて住みはじめました。

親のいない三人の子もたちを引きとった十次ですが、さっそく日々の生活費に困ってしまいました。そこで友



人とも相談し、児童教育施設を作ることになりました。十次は必死でした。十次は会員を募るために毎日のように足を棒にして、かけずり回りました。その結果、趣旨に賛同してくれた人たちから会費が集まることになりました。しかし、その金額はわずかなものでした。それにもかかわらず、十次は医学校の行き帰りに、橋の下などで生活している身よりのない子どもたちを探し出しては、寺へ連れ帰って育てました。三友寺の子どもたちは増え続けていったのです。

上阿知診療所で三人の子どもの面倒を見始めたころ、一万人あまりの子どもたちを助けた英国のブリストル孤児院の院長ジョージ・ミューラーという人が日本に来て、講演をして回りました。十次は、その話を新聞や雑誌で読んだり人づてに聞いたりして深く感動しました。そして、自分は日本のジョージ・ミューラーになりたいと思いました。しかし、その感動が、十次に医者になるための迷いを生じさせることになったのです。



「医者になるべきか、それとも子どもたちの救済に身をささげるべきか。」
三友寺の子どもの数が増えて、その資金集めに走り回る日々が続きました。あれほど固く、「日本のミューラーになろう」と決心したものの、一方では、医者としての自分に期待している郷里の父親、親類や村の人々そして恩師の萩原先生のことを思うと、決心が揺らいでしまう十次でした。
「医者になるべきか、それとも子どもたちの救済に身をささげるべきか。」

悩み続けていた十次に、あるとき、次のような考えが浮かびました。

「医者を目指す者は自分以外にもたくさんいるが、恵まれない子どもたちを救おうと考えている者は、自分しかない。」

明治八年（一八八九年）一月十日の朝。三友寺の境内に、十次は医学書のすべてと、それにノート類や聴診器などを持ち出してきました。山と積まれた医学書に、十次はゆつくりと石油ランプの油をかけていきました。そして、たつぷり油を吸った医学書に、ゆつくりと火をつけました。六年間の思いのつまった医学書は、あっという間に炎に包まれみるみるうちに灰になっていきました。

その突然の夫の行動に、品子は大変驚き、そして嘆き悲しみました。しかし、十次は、悲しみにくれる妻の顔を優しく見つめていました。

一年半という長い間、悩みに悩み続けた十次。

十次は、とうとう答を見つけたのです。

十次、二十四歳のときのことでした。

